

## 直方、江戸時代の文芸活動



今年のNHK大河では、江戸幕府初代将軍・徳川家康の生涯が描かれます。江戸時代の直方はどのようなものだったのでしょうか。今回は江戸期の文芸活動についてご紹介します。

江戸期は国学の研究が盛んになった時代でした。国学とは、『古事記』や『万葉集』などの古典を研究し、仏教や儒教伝来以前の、日本固有の精神や文化を究明する学問です。国学の基礎を築いたのは、荷田春満(かだのあすまろ)でした。春満は、古典・国史を研究、神道・歌道にも精通し、『万葉集僻案抄』などを著しました。春満の教えを受け、国学を一層興隆させたのは賀茂真淵です。真淵は春満に入門し、『万葉考』『歌意考』などを著しました。真淵の門から育ち近代の国学を完成させたのが本居宣長です。医者だった彼は真淵と出会いその門に入り、『古事記』の研究に専念、『古事記伝』などを著しました。

荷田春満、賀茂真淵、本居宣長という国学研究の本流の中に身を投じ大きな足跡を残した人に、直方の青山敏文がいます。敏文は多賀神社の神官で、幼い頃から学問を好み、京に上って歌を烏丸大納言に、国学を春満に学び、歌人、国学者としてその存在を知られるようになりました。敏文は度々京に上り、真淵らとは和歌振興のための月例の和歌稽古会を開きました。その歌会の記録には、荷田春満邸で開かれた例会の「卯月霍公(うづきほととぎす)」の兼題で、荷田春満、賀茂真淵、敏文が詠み合ったとの記録が和歌とともに残っています。敏文は、文人大名として知られた直方藩第4代藩主黒田長清の厚い信任を受け、『福地三所神記』を誌しています。また、宝永年間には多賀宮の側に「広業書塾」を開き、近隣の師弟に国学を教えたりしました。敏文は84歳で亡くなりますが、日本の国学の大家に伍して堂々と歌を詠み合った敏文の存在は、江戸期の直方の文化の質の高さを証しているということが分かります。

「直方歴史ものがたり」 N219ノ

## 筑豊の民話 - 日本武尊と尺岳 -

筑前の国の地理の本『筑前国続風土記』の中に、「頓野は大村なり村中に河流れ、その東に山高くして、境内はなはだ広し。好村なりこの村の奥に尺嶽(しゃくのだけ)あり。高山なり。頓野に属せり」という記述があり、現在の尺岳が「しゃくのだけ」と呼ばれていたことが分かります。ところが、もっと古く遡ると、この山は「はかりだけ」と呼ばれていたのです。

古事記の中には日本武尊(やまとたけるのみこと)が南九州の熊襲(くまそ)の国を攻めた話が載っています。日本中に広がる彼の伝説の中から直方に関係のあるものを拾ってみると、尊は舟路で洞海湾に入り黒崎に上陸、福智山に向かいました。途中尺岳頂上で一休みした尊は、山上にそびえる大岩を見つけ、傍によって背比べしました。すると、恐れ入った大岩が急に一尺ほど縮んで尊に勝ちを譲ったということです。背の高さを測り比べたことから、この山を「はかり岳」と呼ぶようになり、「はかり」がものさしという意味の尺と言い換えられ「しゃくのだけ」、それから現在の尺岳というように変わっていったのでしょうか。

尺岳をあとにした尊は、福智山頂で筑豊一円を見渡したため、福智山の別名を国見岳と呼ぶようになったという話も残っています。尊の足跡は筑豊の各地に広がっており、植木の地名は尊が木を植えたことからおこり、頓野の近津神社は、土地の豪族が弓矢を献上した際「お身体を近く守り給へ」と願ったことによるという話もあります。

「直方むかしばなし」 N388ノ

# 和泉要助 人力車の発明者



明治 32 年、直方駅に降りた森鷗外は人力車の車夫から乗車拒否され、「我をして九州の富人たらしめば」という一文を書きました。この明治時代の代表的な交通機関であった人力車は、直方出身の和泉要助が発明したとされています。和泉要助の詳しい生涯は不明ですが、「風俗画報」(明治 29)「人力車の発明」によると、和泉要助は 1829 (文政 12) 鞍手郡中泉村の長谷川作右衛門の長男として生まれ、23 歳で江戸へ出て名を和泉と改めています。

人力車発明のきっかけは諸説ありますが、仕事先で馬車を見た要助がもう少し小回りの利く乗り物があれば、と思い、それから人力車の試作に取り掛かります。要助は、鈴木徳次郎、高山幸助を誘い、明治 3 年、東京府から人力車の製造と営業の許可を取り付けます。東京府は人力車に車税をかけ、要助ら 3 人は人力車総行事に任命され、支払われた車税の一部を手数料として受け取ることになりました。人力車の製造、営業希望者は増え続けました。明治 4 年には「専売略規則」が出され、発明者に専売権が与えられるようになります。人力車の製造販売者からの特許料は、要助らに莫大な収入をもたらすことになるはずでした。しかし明治 5 年「専売略規則」の施行は見送られ、明治 6 年には人力車総行事も廃止になり、発明者の特権を奪われてしまいます。その後も要助は人力車製造販売業者として生き残ろうと努力しますが、実を結ばないまま窮乏し、明治 33 年 9 月 72 歳で亡くなり、人力車発明者の名は、忘れられていきました。

明治時代、隆盛を誇った人力車でしたが、和泉要助の死後、汽車や市内電車に押され急速に衰退し、さらに大正時代には自動車、自転車が市民の交通手段となり、姿を消していきました。

「ふるさと直方人物誌」 舌間信夫/著 N281 / 「直方文化商工史」直方商工会議所/編 N302 / 「人力車の研究」 齋藤俊彦/著 NL685 /



## はじめの一步 ~郷土資料の紹介~

直方市立図書館にある郷土関係の本を紹介していきます。  
郷土の歴史や文化に興味をもっといただくきっかけになればと思っています。



### 「人力車の研究」

齋藤 俊彦/著 三樹書房 NL685 /

明治時代、重要な交通の足であった人力車。その発明の過程から発展、衰退に至る過程を膨大な資料に基づき論じています。発明者とされる一人が直方出身の和泉要助であることから、人力車と直方とは深い縁があります。



直方市立図書館 直方市山部 301-11 コミュニティのおがた内  
TEL 0949-25-2240 FAX 0949-23-3902